

# あだしの京都

河野裕子

## きのこ——瓢箪崩山

昨夜、永田がお土産をさげてかえってきた。

「えつ、何なに」と袋をのぞくと、なんと、きのこがいっぱい入っている。もう、きのこの季節だったのだ。そんなことにも気がつかず、あたふたと日を過ごし、おまけに、去年以来の病気を引きずって、気鬱きうつなこの一年だったなど思いながら、灯の下でつやつやと光るきのこにしばらく見とれていた。

きのこは全部、ヌメリイグチだった。このきのこは、茹ゆでて大根おろしをかけて食べるにかぎる。久しぶりに食べるきのこのおいしさ。暮らしのささやかな喜びというのはこういう事なのだろう。

私たち一家が、きのこにはまってしまったのは、十数年まえのこと。その頃は、わたしの実家に居候いこうをしていたのだが、ある日、裏の畑はたけの薔薇ばらの木の下に、奇妙なものを見つけ

た。あめ色のデコボコのゴムの棒のようなものが、ぼこぼこ何本もはえている。これは何だということ、いろいろと本で調べているうちに、やっと、正体がわかった。アミガサタケというきのこで、西洋人が最も好む上等なきのこのなさそうだった。

バター炒いためにしたら美味おいいと書いてある。なるほど、おいしかった。身近にこんなきのこがあったのか。そう思って道端や芝生を見まわしてみると、きのこはどこにでも、気楽きらくにのん気そうに、いっぱいはえていた。それまでは、興味がなかったから、きのこがあっても見えなかっただけのことだったのである。

それから、きのこに関する本をどんどん買っていく中で楽しんで読んだが、一番よく読んだのは、山と溪谷社から出ている『きのこ』という本で、水野伸彦さんのきのこの写真にほ

れて、毎晩まいばん飽あかずにながめては溜息ためいきをついていた。この本はとうとう表紙がちぎれて、補正しなければならなくなった。気に入った本というものは、もう自分の身体みたになつて、どこにどのきのこが載っているか、触っただけで分かるようになってしまう。

当時、小学四年生と二年生だったうちの子供たちは、夏休みの自由研究に、きのこを選んだのだが、一番熱心だったのはわたしで、家事も原稿もほったらかしにして、きのこ採りに夢中になっていた。藪やぶや草原くさげに生えるオニフスベというきのこを見つけたときは、びっくりした。だいたい見当をつけてさがしてはいたのだが、実物の迫力はちがう。四十七センチほどの、ふわふわの、白くて丸いキャベツみたいな形の変なきのこで、初めて見たら誰だつて、ギョッとするにちがいない。

とうとう家中がきのこに入れこんでしまつて、尋ねたずねて、田んぼの真ん中の森かげにある、きのこの神さまの「くさびら神社」にまでお参りに行ったこともある。

京都に引越してから、きのこ熱がいよいよ高じて、東大路通りにそって植えられているプラタナスにヤナギマツタケがはえるのを見付けたのは、永田である。このヤナギマツタケというのは、まことに見事なきのこで、大きなものは、団扇ほどにもなる。初夏の頃に、緑鮮やかなプラタナスの葉の間から、クリーム色のきのこのつばが見えると、これはもうどんなことをしても手に入れたいくなる。わたしたちは、どうしたかという、自転車と、コウモリガサと、枝切りバサミを用意して家族四人で協力してこれを探る。永田が自転車の荷台に乗り、枝切りバサミできのこ

をちよんぎる。息子が自転車を押さえ支える役。わたしと紅は、広げたコウモリガサに落ちてくるきのこを集めては、袋に入れていく。

こうして幾袋ものきのこを探って喜んでいったのだが、ある日、新聞を読んでいて、とんでもない所に、きのこ仇が居るのに気がついた。京大の森毅先生も、東大路通りのヤナギマツタケのことを知っておられて、あれは佃煮にして食うと旨いと、得意気に書いておられる。そうかと思つて、佃煮にしてみると、なるほどおいしい。わが家では、味噌汁か鍋の具としてしか食べていなかったのである。洛北岩倉の北の方に、瓢箪崩山という面白い名前の山があり、家から近いこともあって、きのこ採りによく登ったものである。初めて瓢箪崩山に登り、細い尾根道を家族四人で一列になつて歩きながら、山の木漏れ日のやさ

しき、木々の樹脂香の爽やかさに、うつとりとした日のことが忘れられない。

この山でわたしたちは、チチタケやアマミタケ、ホウキタケやフウセンタケなど、数限りないたくさんのきのこのたちに出会った。一抱えもある見事なシヤカシメジを見つけたのもこの山である。晝何枚分もの落ち葉が浮き上がっているので不思議に思つて近寄ると、その下はいちめんイグチだったこともある。

きのこに目の色を変えていたわが家の時代は終わつたのかもしれない。けれど、竹藪に半ば覆われた、今度引越してきた家には、きのこの珍種キヌガサタケがはえる。きのこの女王と呼ばれるこのきのこは、実に優雅なまっ白いレースのマントを広げ、わたしたちの目を楽しませてくれるのだ。

(かわの・ゆうこ「塔」選者)

